

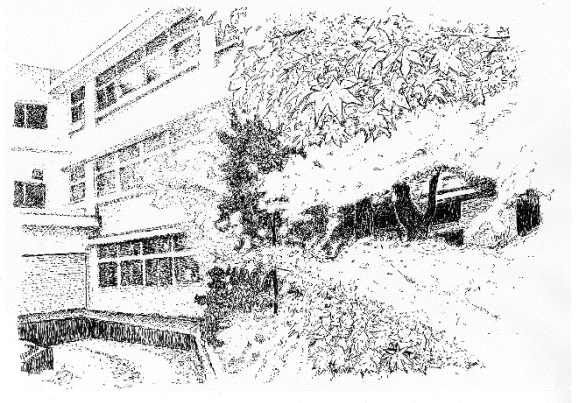
生活科の新しい役割と可能性

保幼小連携が注目され、茨城県では県教育プランに就学前教育の充実が位置付けられたことから、生活科を中心としたスタートカリキュラムが一層重要性を増しています。今年度の夏季実技研修では、小美玉市立橘小学校 水内 幸恵先生、同 納場小学校 毛利 康孝先生を講師としてお招きし、幼小連携のスタートカリキュラムについての実践発表と講話をいただくことができました。幼児教育の大切さと小学校の受け入れ態勢の重要性を確認することができ、すばらしい研修会となりました。講師の先生はじめ、受講生の皆様、運営に携わった多くの方々に感謝申し上げます。

さて、今年度の保幼小連携の研修において、特に重要なことは、保育園・幼稚園・認定子ども園・小学校で託された役割はそれぞれ異なり、決して同じことを実践するわけではないということです。それぞれの目標や目的に応じて、それぞれの教育活動を遂行することが大切です。加えて、スムーズな接続を念頭に置いた教育活動にシフトしていく柔軟性をもつことが大切であると感じました。

改めて言及するまでもなく、幼稚園と小学校では目的から違います。幼稚園の目的は「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の穏やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」（学校教育法第 22 条）であるのに対して、小学校の目的は「心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育のうち基礎的なものを施すこと」（学校教育法第 29 条）とあります。幼稚園教育要領、小学校学習指導要領の改訂とともに、接続カリキュラムの充実により、遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を作り出していけるようにするのが肝要です。

子供にとって小学校への入学とは、遊び中心の生活から（教科）学習中心の生活へと生活スタイルが大きく変わることです。幼児期の子供達は遊びながら様々な資質・能力を身に付け、小学校以降には授業を中心として学び、やはり様々な資質・能力を身に付けていきます。遊びを通した学びと教科学習を通した学びの両方をつなぐのが生活科であり、新入児童の最初の段階における生活科を中核としたカリキュラムが、スタートカリキュラムです。



子どもにとっては、遊び中心の生活から教科学習中心の生活へと生活スタイルが変化することは、かなり大きな「段差」です。これまでは、自分で決めた課題（自分のしたい遊び）を自分で達成する（自分の力で実現する）生活が中心でしたが、教科学習では外から来る課題に自分がどのように対処するのか（知識・技能の習得が中心）が問われるからです。それと同時に、自力での登下校、時間割に基づく学習、施設・設備の違い等々、子ども目線からすれば多くの「段差」がみられます。そのとき、これまで経験してきた「遊び」の要素を多く含んだ活動に基づく日々が送れることは、子どもにとって「小学校でもこれまでやってきたことが通用するのだ」という自信が持てるきっかけになります。これが、スムーズな「適応」を生み出すというスタートカリキュラムの第一の意義なのです。

入学当初の生活科を中核とした合科的な指導は、児童に「明日も学校に来たい」という意欲をかき立て、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらし、新入児童の小学校へのスムーズな「適応」を促してくれることが期待されます。生活科の担う役割が一層大きくなっている理由がそこにあり、私たちは一層研修を重ねていくことが求められています。数多くの研究が収録されているこの実践事例集を参考に、研鑽を重ねていただければと願っております。

生活科・総合的な学習の時間研究部長 宮田 浩昭